
母の日の贈り物

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

母の日の贈り物

【Nコード】

N0721T

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

母から「あんたたち三人からの」カーネーションが欲しいと言われた母の日。

あまり連絡を取り合っていなかった姉妹三人。

長女の私は妹たちに母からのリクエストについてメールをするが…。家族や姉妹（兄弟）についての物語です。

「母の日のプレゼントだけど」

近所まで来たついでに寄った実家で、母がそういえば、と話しました。

「カーネーションでいいから」

「あ、うん」

そういえば来月は母の日だったと、思い出す。

「あんたたち三人からの」

「え、三人？」

「そう。あんたと、芽衣子と若葉の三人からの」

芽衣子と若葉は私の妹だ。

電車に乗りながら、妹たちにメールをした。

私たち三人は仲が悪いということではないのだが、お互い年が離れていたせいなのか、家にいた時もそして家を出た今も、親密とは言い難い関係だった。

私と次女の芽衣子は五歳離れていて、さらに私と三女の若葉は十二歳離れていた。

メールは、お正月の集まりについてのやりとりで、年に一、二通。

直接会うことに至っては、そのお正月にあるかないかといった具合だったのだ。

妹たちのアドレスは、「ファミリー」の項目に入れていた。その項目には、母は勿論のこと、夫や携帯を持たせたばかりの長男のものもあった。

そういった中で妹たちのアドレスは、正直少し違和感があった。

「ファミリー」に入っているのに滅多に使われることのない、二つのアドレス。

私は妹たちのアドレスを呼び出し、宛名のところに入れると、件名を「母の日」とした。

件名「母の日」

こんにちは。

元気ですか。

今日、お母さんから、母の日は姉妹三人からのカーネーションが欲しいと言われたので、私が手配しておきます。

後ほど金額を伝えます。

よろしく。

書いたものを読み直した。

少し素っ気なくなってしまうたけれど、ごちゃごちゃと書いて内容がぼやけるよりはいいだろうと判断して、そのまま送った。

すると、妹たちからはすぐに返信が来た。

最初は芽衣子だった。

件名 re<「母の日」

「了解。」

人の事は言えないと思いつつ、その味も素っ気もない返信に苦笑した。

まあ、解りやすくいいけど、と思いながら。
次が若葉だった。

件名 re<「母の日」

「お姉ちゃん、元気そうね。」

メール、了解です。

でもさあ、私なんて毎年張り切つてさ、お母さんと食事に行つたり、洋服を買つたりしていたのよ。

それが今年からいきなり、カーネーションだけなんて（しかも三人で一緒つてことは、お母さんへの母の日の贈り物は一個になるじゃない？）、なんか、がっかりよ。

お母さん、私からのプレゼントが重荷だったとか言つてた？」

私は若葉からのメールを、驚きながら読んでいた。

食事？ 洋服？

若葉が、そんなことを？

へえ、とただただ驚きつつも、若葉の言う通り、今までのように三人からそれぞれのほうが、まとめてボンのカーネーションよりも受け取る側にとってはいいんじゃないかと思えた。

そして、若葉からのメールを読んだ私は、にわかに芽衣子は母に毎年何を贈つていたのかが気になり、メールを試してみた。

芽衣子からのメールは、前回と同じく簡潔かつ素っ気ないものだった。

「うちの会社の化粧品や健康食品など」

芽衣子は、通販化粧品会社でオペレーターをしていた。

そして、実家の洗面所には確かにその化粧品が常備されていたのだ。

今まで妹たちが何を贈つていたか、全く気にした事がなかったと

いう私もちょっとあれだけど、聞けば聞くほどそれぞれから貰った方が、母にとってはお得だという気がした。

ちなみに私は、毎年花のアレンジや寄せ植えを贈っていた。

そこではたと、三人がそれぞれ別のものを贈っていたことに気がついた。

偶然とはいえ、バランスがとれていたものだ。

GWを利用して、クラブ活動で不在の長男を抜きに夫と次男を連れて実家に向った。

途中で母のリクエスト通り、私はカーネーションの花束を買った。

数年前に実家の側にできた、小さな花屋で。

店は小さいが、腕は確かで、アレンジも上手く気にいっていたのだ。

花代は、三人分だからといって今まで姉妹が出していたであろう合計金額にするとんでもない豪華なものが出てしまうので、私は自分が今までしていた花代の1・5倍を目安に選んだ。

そしてそれとは別に、事前に母が好きそうな食べきりサイズの菓子を選んでいった。

「姉妹三人からよ」

そう言って渡すと、母がふいに見たこともないような嬉しそうな顔をした。

その表情に戸惑いながらも、「芽衣子たちに送るから写真を撮らせてね」と、花を抱える母の写真を携帯で撮った。

あとで妹たちに送る金額請求のメールに、添付しようと思ったの

だ。

母は私たちからのカーネーションを、三年前に亡くなった父の仏壇の前に置いた。

その晩、私がメールを送る前に、妹たちからメールが来た。

母がお礼のメールを送ったらしい。

妹たちは、カーネーションを抱えた母の写真を送って欲しいと言ってきた。

私は慌てて、写真付きのメールを返信した。

すると、すぐにまた妹たちから返信があった。

若葉からは、母の笑顔についてのコメントがあった。

そして、花束に関しては、いつもながらにお姉ちゃんを送る花はゴージャスね、と。

芽衣子からも若葉のあとを追うかのようにメールが届いた。

芽衣子は、今回のことに対するお礼と母の元気そうな姿に安心したこと、更には若葉と同じように花束を褒めるようなコメントがあった。

いつもながら、センスがいいと。

そして、次回（来年）は自分が三人分のカーネーションを贈るからその花束を作った店を教えてほしい、とまで書いてきたのだ。

母から「あんたたち三人からの」とリクエストがあった時、私はやっぱり長女なわけだし、このまま私が毎年やるんだろうなあと思然然と思っていたわけだけれど、妹は妹でそうじゃないことを考えてくれていたのだと知り、嬉しかった。

これからも、一緒にやっつけていこうという妹の気持ちが嬉しかったのだ。

更には、二人からの花束へのコメント。
つまり二人は以前から私が母の日に花を贈っていること知っていて、おそらく見たこともあるんだろうなと思った。

私は携帯を閉じたまま、動けなかった。

毎年母の日の贈り物が重ならなかったのは、妹たちの意思が働いていたからだと知ったからだ。

母が見せたのが最初なのか、妹たちから尋ねたのかは知らないけれど、そこに私の意思は全く入っていないことは確かだ。

掌の携帯を開いた。

母の日のことで、妹たちと今までになくメールのやり取りをした跡が残っていた。

そしてそれは、これから先も毎年こうしてメールのやり取りをするであろう三人の關係の、予告編でもあるのだと思った。

家族であること。

姉妹であること。

今まで考えたこともなかったこの關係を、私は育てていきたいと思っただのだ。

母の日に、本当の意味での贈り物を貰ったのは、私だったのだ。

芽衣子に、来年の母の日をお願いしますということと、花束は実家の側の花屋で作ったことをメールした。

あの花屋は、お届けはしてないわよ、と一言添えて。
すると、一体どういった技を使うのかと思つほど速く、芽衣子から返信がきた。

見慣れた「了解」の文字のあとには、芽衣子からのメールとは思えない顔文字のスマイルマークがついていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721t/>

母の日の贈り物

2011年5月7日07時25分発行